

特集・市長新春対談

国際環境自治体協議会(イクレイ)日本事務所長と語る地球環境

市長 あけましておめでとございます。まず。

加藤 おめでとございます。

市長 今日は新春対談ということで、狭山市が昨年5月に加入した国際環境自治体協議会(イクレイ)の日本事務所長であり、環境庁地球環境部の初代部長でもあった加藤さんにお越しいただきました。加藤さんは昨年11月に『循環社会』創造の条件』という本を出版されましたが、今まさに現実問題として環境問題に取り組むとき、どのような方法があるのか、アドバイスを含めてお伺いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

加藤 よろしくお願いたしました。

① 「循環型社会」から「循環社会」へ

市長 まず、私はこの本のタイトル、「循環社会」という言葉に非常に感激いたしました。普通「循環型社会」と

表現しますが、このように言い切ることで非常に強くこの言葉が生き、切羽詰まった状況であると分かります。

加藤 大戦後、経済をよくするため世界の国々はトップギアで突っ走ってきました。技術革新に費用を注ぎ込み、資源を湯水のように使って、言わば大量生産、大量消費の世界を作ってきたのです。その結果が大量廃棄となり、日本だけでなくあらゆる国で廃棄物処理が問題となっています。だから基本的な経済構造そのものを変えなくてはいけない。そのために政治を変えられるのは、国民自身であるし、市・県・国などあらゆるレベルでみんなが一斉に取り組むことが必要です。そういう中で、狭山市で早くから環境問題に積極的に取り組んでいるということは、非常にありがたいと思います。

市長 市にはいろいろな施策がありますが、私の場合は、物を大切にすること、人を大切にすること、これが非常に



だんと理解され支援されてきました。「宣言する」という行政からの投げかけで、市民の協力的体制ができてきたのです。これを私は大事にしなくてはと思います。

加藤 そうですね、まさにその通りです。私も宣言を読ませていただきましたが非常にシンプルで力強い、よい宣言です。今、市長さんがおっしゃったように、市からの投げかけで市民が答えてくれるというのは、非常によいことですね。

② 国を動かす

市長 ありがたいでございます。実は狭山市の場合、所沢市、川越市とともにダイオキシン問題が大きく取り上げられています。今まで個々に業者に指導をしてきたのですが、方針がはっきりしないということで、県と近隣市首長が集まり、国に強く要望をしてきました。その甲斐あって今回の法律制定となり、私たちは問題

大事だと思っています。自治体は市民本位ですから、進むべき方向は一つです。そして市の方針、取り組みがしっかりしていれば、市民がバックアップしてくれるんです。だから環境問題は自治体が積極的に取り組み、解決できると思っています。狭山市ではリサイクル都市宣言を全国で3番めにしました。具体的な数値目標を掲げ推進してきましたが、だん



を抱えている市町村が力を合わせて取り組めば国も動かせるという一つの事例を見たわけです。これは、これから色々な分野に波及していくと思います。

加藤 ダイオキシンの問題に関しては私は大量生産・大量消費のツケを一自治体だけに払わせていいのか、と思っています。もっと、他の市・県の住民も発言したほうがいいと思うんです。今までも、例えばフロンなどは消費者みんなが使わないと言って、それが法的に決められたこともある

し、現実には狭山や所沢でダイオキシンについてこれほど心配され運動が起きてきているのですから、さらに声をあげていったらどうかと思うんです。生分解性のものや、塩素を使用していないプラスチックでなければ使わないとか、住民の中からそういう声が出てくればいいですね。狭山市のこの度のダイオキシン条例制定も、市長さんのそういう思いの表れだと思っています。

市長 そうです。この条例は全国に先駆けて執行部から提出しました。そして、市でやると言った以上責任がありますから、より一層これからの取り組みにエネルギーを注ぎ込んでいくつもりです。これには大きな変化を求めると時間がかかりますから、自治体でやることの必要性を感じているんです。

加藤 挑戦したらいいと思いますよ。「狭山市だけでやってもだめだよ」という意見も出ると思いますが、実行することでいろいろな話題が広がります。ご存じのように、カリフォルニアの公害規制の中で、電気自動車に関する州の法律が広がって国を飛び越え、ついに日本でもハイブリッド自動車が出てきたのですから。まさに地方からの発信が大切です。特に

今、国はがんじがらめで、動けない状態です。環境が大事と言いながら一方では経済も大事。ブレーキとアクセルを同時に踏んでいるようなものです。その点、市の場合、市長さんが自分でブレーキもアクセルも調整できますから期待をしています。地球環境問題と言っても、一つひとつの根っこは全部ローカルにあるわけですから、自治体が積極的になることが、まさに地球を救う最も本質的な力になります。ぜひ市長さんのリーダーシップのもとに、狭山市が全国の模範となるようないろいろな施策を、次々に出していただきたいですね。

市長 精一杯努力していきたいと思っています。

③ NGOTOWN

市長 先日NGO法案が決められましたが、加藤さんのように国でも活躍し、現在はNGOとして活躍されているというかたから見ると、これについてどんなふうにか考えられますか。
非政府団体、一般に市民活動団体のこと

加藤 NGOには非常に期待しています。NGOを社会の正統な一員として受け入れ、政策決定の際に調整役となってもらおうということです。

市長 そういった必要性は、私も感じています。

加藤 市長さんは市民に直接つながっていますから、ぜひそういった市民の声、NGOの声というのを聞いて

加藤三郎氏プロフィール



1939年11月東京生まれ。66年東京大学工学系大学院修士課程を修了し、同年厚生省入省。その後環境庁の設立に伴い、主に同庁で公害・環境行政を担当。90年同庁地球環境部の初代部長に就任。地球温暖化防止行動計画の策定、地球サミットへの参画などを経て、93年退官。ただちに環境文明研究所を設立するとともに「21世紀の環境と文明を考える会」を主宰。このほか(社)海外環境協力センター専務理事、住友生命総合研究所客員主任研究員、循環社会推進国民会議事務局、日本環境経営者協会顧問、日本環境土木工業会顧問、国際環境自治体協議会日本事務所長なども兼務している。

[著作]「岩波講座 地球環境学」第1巻 現代科学技術と地球環境学・第10巻 持続可能な社会システム(岩波書店1998年)、「地球市民の心と知恵」(中央法規出版1997年)、「環境と文明の明日 - 有限な地球で生きる - 」(プレジデント社1996年)、「『循環社会』創造の条件 - 日本が生き残るための十四章 - 」(日刊工業新聞社1998年)ほか。

ていただきたいと思えます。

市長 そのためにはNGOをどう育てていったらいいのでしょうか。

加藤 NGOというのは、自分たちでお金をつくり、知恵を出す団体です。官製NGOというのは、本来ないのです。だから行政がやるべきことは、ミーティングの場とか、情報を提供することです。そしてルールはもちろん必要ですが、活動内容には干渉せずに支援することですね。実は私も、21世紀の環境と文明を考える会と「循環社会推進国民会議」という2つのNGOを本格的にやっています。なぜNGOかというと、問題に取り組むためには意識や価値観を変えなくてはいけない。そしてそのた



「物を大切にすること、人を大切にすること、これが大切だと思います。」

めには権力や役所から離れていけば、自由の身になって何かを言えるわけです。

市長 では、NGOの活動はどのようなやり方が効果的でしょうか。

加藤 自分たちで主導性をもち、自分たちのお金を持ち寄ってやること、NGO活動です。政策提言型のプールの周りにボランティア、つまりNGOがいて、資金面を支えながら提言をしていくことです。これは少ない人数でもできます。実際、私の研究所もそうですから。

④ 狭山市の取り組み

市長 さて話は変わりますが、狭山市では全国でも珍しい「エコスクール」に指定された新・入間川小学校を建設しています。この学校には風力を使って水を循環させ、生物を観察できる池や、太陽光をどのように利用しているかを毎日子どもたちがゲージで見られるような仕組みも取り入れています。

加藤 太陽光などを利用した新エネルギーはいいですね。このような素晴らしい学校でしたら、ぜひ保護者なども使えるようにしていただきたいですね。



市長 この学校のユニークさは、壁を作らないことです。大きなセンタードームを作る予定ですが、ここはいつでも市民が自由に使えるように開放型にしました。こういったことでも、環境教育に対する理念を市民の皆さんに理解していただきたいと考えています。

加藤 なるほど、地域住民も教育現場に入れる学校施設ですか。

市長 こういった取り組みも、市として全国に先駆けてやっていこうとしています。それから市内で収集した古紙をノートに再生し、子どもた

ちに表紙の絵を描いてもらって、子どもたち自身が使っているんです。

加藤 そうやって子どもたちにも地球の大切さというのを、頭だけでなく体で理解してもらうのも、大変いいことですね。

市長 ありがとうございます。加藤さんのお考えのキーワードの中に、循環・共存・抑制の3つがありますが、特にその中で自然・緑との共存が大切だと思っています。これから行政としても、環境問題の取り組みの中で緑を増やしていきたいと考えています。

加藤 ぜひやっていただきたいですね。狭山市は緑が多いですから、ぜひ農地を残し、そしてできたらただ残すだけでなく、質のよいものを残して欲しいですね。例えば有機肥料を使うなど、豊かな大地を残して欲しいです。そうなればお茶ももっとおいしくなると思いますよ。

市長 そう思っています。その取り組みはすでに始まっています。

⑤ 子どもの教育

加藤 さて市長さん、私から一つお願いです。日本の小中学生というのはあまりにも豊かな社会に生きてい

て、それ以外の世界があることを知らないのです。例えば東南アジアやアフリカなどには飲み水さえ事欠くような国々があり、そこに何十億人という人が生活しているんです。そういう世界との差を知らないまま子どもたちが育っていくのは非常に危険です。イクレイでは子どもとの交流などもしていますので、狭山市でもそういうことを考えていただけるといいですね。本当の意味で国際的な目を養ってもらいたいものです。

市長 その点は私も非常に関心があります。狭山市には10年前からモンゴルに植林に行っている市民団体があります。ぜひモンゴルの子どもたちと市内の中学生との交流を進めたいと考えています。そしていずれは現地に行つて見るということも計画しています。

加藤 それはよい計画ですね。
市長 ありがとうございます。今の社会の中で何一つ不自由なく暮らして、物はお金さえ出せば何でも買える、お金がないと悪い事を考える、そういう悪いサイクルが現実にあります。現地に行き実際に見ること、それが変わってくると思うのです。子どもたちが、あるとき自分たちの周りを見回して、とんでもな

い世界を大人が自分たちに残してくれた」と思われたい社会を築かなければと思っています。

加藤 私もそう思います。地球という同じ星に生まれた、同じ人間なんだから、飲み水にも事欠くような国の現実を見て、何をすべきか考えることが大切です。そうでないと世界の平和、安定などあり得ないですから。素晴らしいエコスクールの中で、風力とか太陽光発電とともに、こういう人のことも知ってもらいたいと思います。市長さんがおっしゃったモンゴルのこと、これは非常にいいじゃないですか。

市長 ぜひ進めていきたいです。これからの21世紀は、子どもたち自身



「自治体が積極的になることが、まさに地球を救う」
最も本質的な力になります。」

が生きる世紀なんですから、その教育も重視していきたいですね。

⑥ 次世代を担う人たちへ

加藤 私も、今まさに市長さんがおっしゃったことを考えています。20世紀は私たちの世紀でしたが、21世紀は若者たちの時代です。ですから、若い人たちにそれを担っていく力を持たせなくてはいけないのです。今の危機をよく知ってもらわなくては。そしてそういう危機を作った20世紀の人、私たち大人に、鋭い批判を投げかけてもらわないと。また、若い人自身が豊かさの恩恵を受けているのですから、そのぬるま湯から飛び出して冷たい風にあたる覚悟をしてもらわなくてはいけないのです。それが、環境教育の一つの役割だとも思うんです。

市長 それには具体的に実験したり考えたりする時間を作ることが必要ですね。自分で見たり、手で触ったりしてこれが環境だと言われるものを、小さいうちに身につける機会が必要だと思えます。

加藤 そうですね。この水はおいしいなどと言って、飲料水にまで贅を尽くしている。この贅沢を、地球の何



十億の人がしたらどうなってしまうだろうと、せめて一週間に1回でもみんなに思い出ししてもらって、できるところから取り組んでいただきたいですね。特に市長さんや議員さんなどプロのかたは考えていただきたいです。

市長 これからも、皆さんのアドバイスや市民の協力を得て、日本一の自然環境を持つ都市となるよう頑張りたいと思います。今日はさまざまなお話をいただき、本当にありがとうございました。

加藤 こちらこそありがとうございます。狭山市の今後の取り組みに大いに期待したいと思えます。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
問い合わせ広報課へ内線7161